

日本語能力混成クラスにおける異文化理解の授業

——日本人に話しかける力の養成——

The cross-cultural understanding in Mixed Level Class
: The training to gain skills to talk to Japanese people

梶原 綾乃

要 旨

本稿では 2014 年度後期より 2015 年度後期までの 3 期にわたる、留学生別科必修科目「異文化理解」の授業を報告する。このクラスは、来日直後の留学生のみのクラスであり、N5 レベルから N1 レベルまでの日本語能力混成クラスだったため、日本語による講義を全員が理解することは困難であった。しかし「初対面の日本人に話しかける」という全レベル共通の課題を来日直後の留学生に見出し、異文化を理解する手段として、アンケート調査を全員に課すことによって、それぞれに与えられた課題を遂行する姿勢、態度を評価し、そこで得た結果を各自の異文化理解と見なすことにした。その授業の詳細を報告する。(実践報告)

キーワード： 日本語能力混成クラス、異文化理解、アンケート調査、話しかける力、やりとげる力

第1章 研究の動機

留学生に「もっと日本人と日本語で話せ」と言っても、なかなか話せないのが現状である。何よりも「日本語で話しかける」ことが難しい。仮に話しかけたとしても、次に何が返ってくるかわからない。語彙が少ない留学生にとっては、ある意味恐怖かもしれない。しかし、日本で生活していると、どうしても日本人の援助を求めなければならない場面に遭遇する。道がわからない、機械の使い方がわからないなど、来日直後から、その難問に直面する。だから留学生たちは、同国人と共に行動する。自分より日本語ができる友だちに通訳を頼めるからである。逆に、同国人がいない留学生は、メキメキと上達する。頼るのは自分しかないからである。前述の通訳を頼まれた留学生も、また話す機会、聞く機会が増え、さらに上達する。そして、できない学生は、依然できないまま、同国人の群れの中で無為な時間を過ごすのである。

もちろん、それがすべて悪いとは言わない。生きていくために、多くの人の援助が必要である。だが、ここで少し「話しかける」スキルと、「話を終わらせる」スキルを知っていれば、留学生は、さらに日本人の援助を得ながら、日本で生活はさらに豊かになるのではないだろうか。

以上のようなことを常々考えていた矢先、思わぬ機会を得た。2014年9月、朝日大学留学生別科で日本事情科目「異文化理解」を担当することになったのである。

この科目は、別科生の必修科目のため、対象は来日直後の留学生全員である。多国籍はもちろんだが、日本語レベルも N5 レベルから N2、N1 を目指すレベルまでと非常に幅広い。そのような留学生たちを相手に、90分全15回の授業で何ができるだろうか。様々な問題を前に、改めて「異文化理解」とは何かをここに述べ、さらに「話しかける」という課題を交えて、その3期(2014年後期、2015年前後期)にわたる授業実践を報告する。

第2章 異文化理解とは何か

そもそも文化とは何か。文化と言うと、日本における歌舞伎や能、茶道などの伝統的文化を示すことも多い。だが留学生が実際に直面する文化は、礼儀やマナーなどの生活習慣や価値観や思考様式などの言語行動といった日常生活様式でもある。「日本ではお箸を使う」といった食習慣から「日本人は借りたものはすぐに返そうとする」といった生活マナーや価値観まで、母国では問題にならなかった行為が日本では顰蹙を買ったり、良かれと思った行為が却って仇になったりする、様々な様式に対する違和感、これこそ来日直後から留学生が最初に感じる「異文化」である。

では、「異文化」を「理解」するためには、どうすればいいのか。各文化の特殊性を挙げて伝えることも、確かに異文化理解の一つであろう。しかし、それらの特殊性も、時代や地域性があり、必ずしも定型化されたものとは言えない。ある地域や個人の特殊な行為を挙げて「これが日本文化だ」と断定されても、多くの日本人に受け入れられない情報も海外では多々ある。実際、留学生の中には「ステレオタイプ」の日本人像を持ったまま来日する学生も少なくない(梶原 2004)。それだけに、文化を教えるということは、非常に難しい課題である。

そこで、ここでは住原他(2001)の異文化の学び方の定義を採用したい。

異文化を理解しようとしたり、また自分の思いを異文化の人々に理解してもらおうとするとは、そういう姿勢そのものが貴重なことである。理解しようとしたり、理解してもらおうとする意識や努力の継続こそが、お互いをつなぎ合う糸なのであり、ある固定された知識を持っているだけとか、外国語を話すことができるということだけでは、異文化と関わっていることにはな

らない。それは「かかわりの停止」ですらある。異文化社会のなかに身を置いていてもいなくても、異文化に意識を向ける意欲を持ち続けていることが、基本的に重要な姿勢だと思われる。(傍線筆者)

「理解」とは「わかったこと」ではなく「理解しようとする意識や努力の継続」であり、「かかわり続けること」と住原他は定義している。教師が「〇〇文化はこうだ」という知識を提示したところで、それは学習者に一つの枠を与えるだけで、場合によっては「偏見」を生む可能性もある。文化は当事者の解釈や時代によって変容し得るものであり、教師は何らかの正解を持っているわけではない。各個人が感じ、悩み、一つの結論を得ながら、日々修正する過程こそが「理解」と考える。

つまり、留学生にとっての「異文化理解」とは、現在の生活で感じることに全てに対して、わかろうとする態度や姿勢を作ることであり、その行為によって正統的に社会参加ができることを目指すことである。これらの経験は、留学した者にしかできないものである。留学とは、異文化社会に常に身を置くことである。それは大変なことであるが、母国での外国語学習では決して得られないものがある。それが一人でも多くの人の考えを聞くことである。そしてその多くの人の考えを知る手段として、アンケート調査を採用する。留学生が行うアンケート調査によって導かれた回答を、留学生それぞれの異文化理解と見なす。

第3章 アンケート調査と日本語レベルの問題

留学生によるアンケート調査実習に関して、過去にいくつかの教材が出ている。(谷口他 1992、1993)しかし N5 レベルに達するかどうかの留学生が多いクラスでは、質問を理解するだけで時間がかかるし、N2 レベルの学生には簡単すぎる。各学生の負担も違うので、正当な評価も難しい。

白谷・朴(2002)は、調査票調査(アンケート)の利点に以下の3点を挙げている。(傍線筆者)

- ① 多くの人々を対象に行うので、調べたいことをより一般的に把握できる
複数の人に対して、同じ質問をすることによって、比較できる意見を集める。
- ② 調べたいことをコード(符号)化するので、より客観的に把握できる
さらに回答を定型化することで、意見を明確化する目的がある。
- ③ 聞き取り調査や観察調査がある種の技術が要求されることに比べ、より簡単に始められる。

ここで注目したいのは、傍線で示した点である。同じ質問をすること、回答を定型化すること、技術もさほど要しない点、これらを集約すると、初級レベルの学生にも可能である。

例えば、「AとB、どちらが好きですか」といった二者択一の質問は、既に初級前半での文型である。また「A」という単語さえ聞き取れれば、回答として採用することもできる。さらに、初級文型の「一週間に何回、〇〇しますか」は、予め複数の選択肢を用意すれば、アンケートは容易に行われる。もちろん、中上級レベルの学生には「〇〇について、どう思いますか」という自由回答式を採用すれば、聞き取りや語彙知識など彼らのレベルに相当する難易度と満足度が得られると考える。

今回は、面接質問法(他記法)を採用する。直接、日本人の回答者と面接し、回答者の回答を調査員(ここでは留学生)が記入する方法である。この方法を採用することで、日本人と実際に会話する機会を設ける。また、最初は、教員が紹介した日本人回答者を用意するが、最終的には、自分の力で日本人の回答を集めることを目標とする。その機会を通して、日本語だけではなく、日本人の態度や口調、などのノンバーバルなコミュニケーション手段を体感し、さらに深く異文化を理解してもらうことを期待する。

第4章 アンケート調査で求められる能力「話しかける力」と「やりとげる力」

日本語のレベルに大きな差がある場合、学生たちの評価をどうするべきか。また前述の「異文化を理解しようとする姿勢、態度」をどのように評価するべきか。

教案を作成するとき、まずその場面で使われるであろう言語や態度、方略をイメージする。面接質問法(他記法)の場合、まず①話しかける、②自己紹介をする、③協力を依頼する、④了解を得て質問をする、⑤回答を聞いてメモをする、⑥わからないとき聞き返す、確認する、⑦アンケート完了を回答者に伝える、⑧お礼を言う、という展開が容易に想像できる。さらに、集めた回答を、①内容によって整理する、②集計する、③表とグラフをつくる、④それらの回答から顕著な特徴を見つけ出す、⑤その特徴の背景、原因を推測する、⑥それらを文章にまとめる、⑦場合によっては、他者の前で発表する、という流れも必要である。これらのアンケート調査活動を行う上において、日本語能力を無視することはできない。しかし、レベル差が歴然とあるクラスにおいて、単語や文型は基本的かつ最小限の日本語を教えることしかできないであろう。中上級者にとって若干簡単な日本語に思えるかもしれない。

しかし、それ以上に「知らない人に話しかける」という課題が、全体の課題の難易度を高めている。特に留学生の多くは「日本人と話せない、友だちになれない」と悩んでいる。梶原(2003)の調査では、日本人も留学生も交流を望みながらも、お互いに「相手から声をかけてもらうことを待っている」ということも判明している。

つまり、N5 レベルから N1 レベルの学習者まで、日本語のレベルと関係なく「むずかしい」とされる共通の課題かつ習得したいと思う能力、それは「知らない日本人に話しかける」という能力である。実際、彼らは来日直後から、その課題に晒されているはずである。空港に到着し、目的地にたどり着くまでに道を尋ねるその行為は、N5 レベルであっても容赦なく求められる。場合によっては、N2、N1 レベルの学生よりも、多くの人を巻き込みながら、うまく解決できる可能性もある。これらの能力は、日本語能力とは関係なくかつ今後の日本生活では必要とされる能力の一つである。

今回の授業では、教員は最低限の言語知識と異文化に関する知識(マナーや態度)を提示するのみで、学生は現場に飛び出し、そこで出会う障害や困難に対して、自分たちでどうやって解決していくかを俯瞰で眺めながら、最終的に期日までに調査を完了させること、その点を評価する。もちろん、場合によっては N5 レベルの学生が辞書を使ったり、上級レベルの学生の助けを借りたりする行為もあるであろう。言語教育では許してはいけないルール違反ではあるが、だが実際に、日本という異文化で適応するためには、それらの方略も一つの生きる術なのである。多くの人の協力を得ながら、自分の課題を解決していくことを評価の基準とする。

また、教室外での活動、教師と学習者以外の第三者を交える際には、日本語能力が高かったとしても、予想外の事態(無視される、思うような回答が得られない等)も考えられる。本来、日本語教育(言語教育)であれば、このような事態を避けるため、教室内であったり、教員が集めたゲストのみで対応したりすることになる。だが今回は「異文化理解」がテーマである。無視されることも、一つの異文化の形と見なす。そこに起こる問題を、どのように対処し理解するか。場合によっては「日本人は冷たいです」という結果になるかもしれない。だが、その現実を受け入れることで、日本社会という異文化に適応する方略を模索する機会が提供されると考えたい。さらに回答してくれる日本人の希少性を感じ、感謝できることを期待したい。但し、第三者(今回は回答してくれる日本人)

にできるだけ迷惑をかけないように、また留学生たちの不利な評判を作らないためにも、大学内での調査に限定する。大学内であれば協力も得やすく、問題が生じても教員が間に入って対応が可能だからである。

さらに、アンケート用紙作成や回収、集計に関しても、教員から最低限の(初級レベルでも理解ができる)文型を使ったワークシートを提供し、空欄を埋めればレポートや発表原稿が完成するように指導する。

日本語能力によって、評価されるのではなく、あくまでも「アンケート調査を最後までやりとげる」こと、そのためには、様々な協力者を得て、かつその後も持続していける姿勢こそが、「異文化理解」の最大の目標である。

第5章 授業を行う際の留意点

課題を遂行するための様々な手段、方略を認めるとはいえ、やはり不正を助長させることはできない。そこで、今回の授業を行う際に、いくつかの仕組みを設ける。

グループ分け

アンケート調査を行う前にも、できるだけグループ活動を取り入れる。だがその際、なるべく同じメンバーにならないように、毎回組み合わせを変えるようにする。これは、何度も共に行動を続けると自然に役割が生じ、依存関係が生まれやすくなるので、それを回避するためである。

アンケート調査その1におけるグループ分け(ジグソー法の活用)

最初のアンケート調査を行う際のグループ分けは、ジグソー法を活用する。ジグソー法とは、学習方法の一つである。「ホームグループ(ジグソーグループ)」と「エキスパートグループ」という2種類のグループを作り、各メンバーが異なる資料や知識をもちより、それをグループで総合することで学習を進めていく方法である。友野(2015)が挙げているように、このグループは人種、性、成績等の面で多様であることが望ましい。その点で、今回のアンケート調査には好都合である。

仕組みは図1のとおりである。質問グループと行動グループ、二つのグループ構成を用意する。質問グループは、初級レベル、初中級レベル、中上級レベルに分ける。このグループは、アンケート調査を行う前に質問内容を把握するための話し合いを行い、アンケート終了後、各自が集めた回答を集計して、結果をまとめ発表するためのグループである。

他方、行動グループとは、実際に日本人にアンケート調査を行う時、共に行動し、一人の回答者に各レベルの質問ができるようにするためのグループである。つまり、行動グループには各レベルの質問を持つメンバーが揃うことになり、回答者は、その3~4人の質問に答えるだけである。このグループ構成によって、初級レベルの学生が日本人回答者との意思疎通が難しくても、上のレベルの学生が援助介入することも可能になる。

この組み合わせにより、同じ質問内容であっても、全ての学生がそれぞれの行動グループで必ず質問しなければならない。それは、日本語ができない学生にありがちな「他者の答えをそのまま写すこと」ができなくなり、全ての学生に質問をする責任を課すことになる。

「日本人に話しかける」課題の段階を設定する

前述のとおり「日本人に話しかける」という行為は、どのレベルの学生であっても難しい。そこで、日本人との接触の難易度を意識して、課題を段階的に提示する。

- ① 教室を出て、グループで日本人に質問する機会を設ける。(大学探検①)

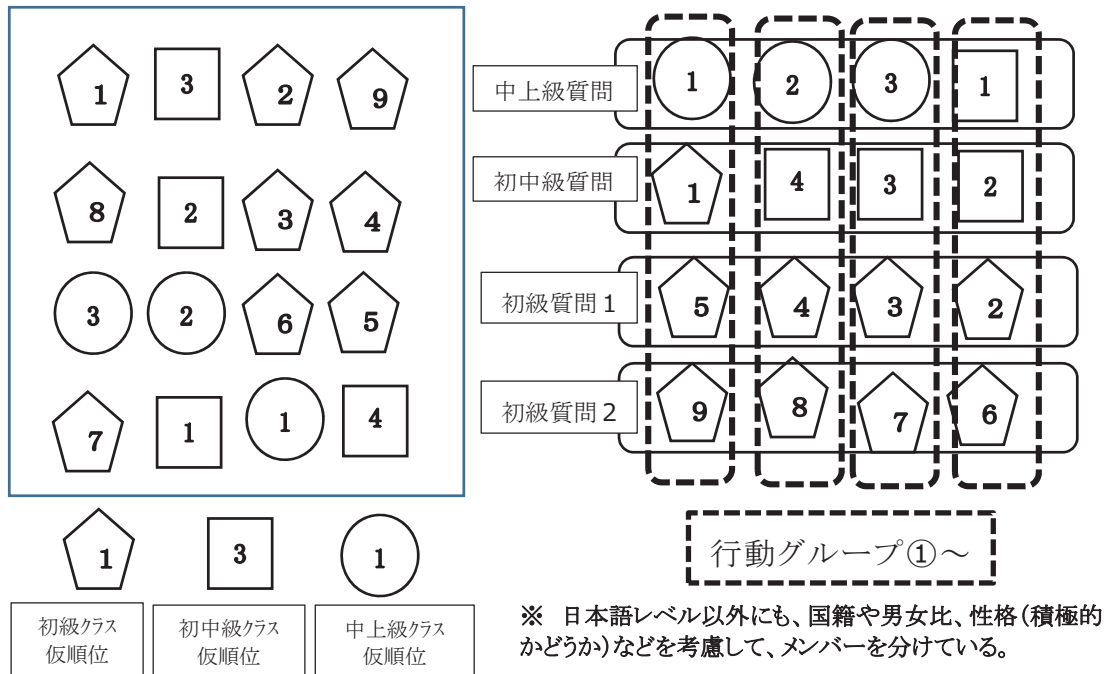


図1 ジグソー法を活用したアンケート調査

この段階で、教室を出ることへの違和感、声をかける恐怖心を払しょくさせることを目的にする。

② 日本人回答者を教員が予め用意する。(アンケート調査 その1)

日本語教師以外と日本語で話したことがない留学生が多いので、まず「確実に」「わかりやすく」応えてくれるであろう回答者(大学内関係者)を用意することで、日本語で質問する経験を積ませることを目的にする。また、その後のアンケート調査でも再度協力を依頼するようになれば、学生自身の「人脈」を形成する効果も期待できる。

③ 限られた時間で、できるだけ多くの回答を得る。(大学探検②、アンケート調査 その2)

この段階では、教室に戻ってくる時間と目標回答者数だけを設定し、学生たちに自由に行動する時間を与える。本来、目指していた「日本人に話しかける」アンケート調査である。

以上の段階を設定することで、留学生の精神的負担を軽減することができる。

アンケートの回答者名を必ず聞いてメモをする

面接質問法(他記法)を行う上で、必ず回答者の名前を聞いてから回答を書き込むことを徹底させている。それは、他の人の調査結果を写して、不正を防止するためである。それと同時に、数少ない回答協力者の名前を覚え、今後も調査依頼で活用してもらうためでもある。

第6章 授業の流れ

今回報告する授業は、3期(2014年後期～2015年前後期)に渡って行われた「異文化理解」の授業をまとめて報告する。これは学生の言語的活動を詳細に記すためではなく、授業の展開を通して、学習者の態度がどのように変容していったかを、複数回の結果の共通点を述べることで、授業の効果を示すためである。

- 1期 15名(国籍:ベトナム10名、中国2名、ミャンマー1名、ドイツ2名)
 (日本語レベル:初級前半8名、初級後半4名、初中級2名 中上級1名)
- 2期 23名(国籍:ベトナム19名、中国2名、ミャンマー1名、マレーシア1名)
 (日本語レベル:初級前半5名、初級後半10名、初中級6名、中級2名)
- 3期 17名(国籍:ベトナム14名、中国2名、ミャンマー1名)
 (日本語レベル:初級前半7名、初級後半5名、初中級4名、中級1名)

回	授業項目	キーワード
第1回	異文化理解とは何か	異文化理解の定義/異文化適応理論と現在の自分
第2回	イメージと差別	母国に対するイメージ/差別が生まれる過程
第3回	大学探検①	大学を歩き回って、日本人に質問する
第4回	日本人に聞きたいこと	ブレインストーミング、アイスブレイキング
第5回	日本人に話しかけるために	パーソナルスペース、ロールプレイ、友達になる過程
第6回	アンケート調査 その1①	※食堂や清掃の職員に面接式アンケート
第7回	アンケート調査 その1②	※売店や図書館、大学職員に面接式アンケート
第8回	アンケート集計、まとめ	集計の意味、表やグラフの読み方、KJ法
第9回	アンケート報告発表	報告発表、お礼状を書いて渡す
第10回	大学探検②	「辞書に載っていない日本語」
第11回	日本人に聞いてみたいこと	質問の背景、仮説を考える
第12回	アンケート調査 その2①	※ 学内での調査
第13回	アンケート調査 その2②	※ 学内での調査
第14回	アンケート集計、まとめ	前回同様
第15回	アンケート報告発表	前回同様

表1 異文化理解の授業の流れ

第1回 異文化とは何か(異文化理解の意味と異文化心理適応過程について)

前述の異文化の定義に関する講義と、異文化適応理論を用いて、これからの1年間で段階的に起こりうるであろう心の変化を講義する。(ホームシックやスランプになる可能性を知っておくことで、留学生活の心構えを促す。)

講義終了後、学生にこの講義でわかったことを自由回答式にプリントに書き込ませて、理解度ははかる。どれくらい理解しているか、あるいはしようとしているかを教員はチェックすることで、今後のグループ分けを考える。

第2回 イメージと差別

各自がグループになって、与えられたテーマ(中国、ベトナム、ミャンマー、ドイツ、マレーシア等)に関してイメージすること、知っていることを、ブレインストーミングで出せるだけ(授業では20~30)出していく。国籍が全員同じ場合(初級クラス)は、母語も可だが、発表は日本語で行うように指導する。国籍が違う場合は、辞書使用も可としている。とにかく、思いつく単語を挙げていくように指

導する。その後、グループごとに発表して、他国の留学生から見た母国のイメージを知り、それに納得できるかできないか、あるいは意外な視点で見ていることを知り、理解度が偏ったイメージを作り、さらに差別につながる危険を感じてもらおう。

このブレインストーミングは、共通するあるいは意外なイメージを出し合うことで、話が盛り上がり、アイスブレイキングにもなっている。

第3回 大学探検①「この写真は、どこですか」

第3回は、前述の学内で日本人に声をかける訓練の第一段階である。学内の写真(あるものの一部分)を見て、それがどこにあるかを、学内を歩き回って探すという課題を与える。学内の人間に積極的に質問することも推奨する。そのための簡単な文型、会話を確認して、教室外に学生を送り出す。各グループ(1グループ3~4人×3~5グループ)の課題は、全く別のものであり、答え合わせができず、自分たちで探さなければならない。言葉があまり伝わらなくても、写真が載っているプリントを見せることで協力が得られやすくなっている。この場合、自力で見つけたグループの評価が高いのではなく、何人の日本人に協力を求めたかが重要である。(上級レベルの学生やまじめな学生に限って、自力で見つけようとするので、写真の難易度の調整が必要である。)

天候やそのときのグループメンバーにもよるが、学生たちの反応は概ね良好である。日本人と初めて話す学生もいて、うれしそうに報告してくる学生も多い。またグループ活動で協働するため、学生同士も仲良くなりやすい。

第4回 ~第8回 アンケート調査 その1

第4回 日本人に聞いてみたいこと(動機づけ)

第2回で行ったイメージに関するブレインストーミングを、今度は「日本」というテーマで行う。全グループの発表を終えた後、自分が日本人にアンケートをするなら、何が聞きたいか、質問項目を20ほど考えさせる。教員は、その結果から留学生の日本社会や文化への理解度と関心度をはかる。

第5回 アンケート調査をする前に(ロールプレイとパーソナルスペース)

日本人に声をかけたり、質問したりする際に、気をつけるべきことは何かを考えさせる。礼儀、マナー、聞く態度、それぞれを学生同士で考えさせると同時に「パーソナルスペース」の問題を教える。これは、いわゆる距離感の問題である。日本人のパーソナルスペースの範囲は、他国に比べて広いという説がある。いくら正しい日本語で話していても、初対面の人が1メートル以内で話しかけると、日本人の多くは圧迫感や恐怖心を覚える可能性があることを伝えておく。

そして、実際に声をかけて応えてくれた場合と、万一無視された場合の対応も考えさせて、全員でロールプレイを行う。

第6回 アンケート調査①

アンケートでは、日本人20名以上、外国人20名以上に質問するという課題を課す。この日本人20名というのは、別科関係者(留学性がよく会う教職員)13名+紹介するゲスト回答者4名+アルファ3名(学生が個人で努力して聞く回答者数)という設定である。初回は、あらかじめ回答者として依頼していた学内関係者(1回目は、食堂と清掃業者の職員)の職場に学生を連れていく。

また質問グループの質問は、教員側から提示する。前回の学生が考えた質問を採用することもあるが、その多くは、自由回答式であったり、選択肢が多すぎたりで、アンケートに適さないため断念することが多かったためである。

各レベルの質問例は、以下のとおりである。

初 級レベル:「朝ごはんは、パンですか、ご飯ですか」(2014 年・2015 年後期)「食事のときに『いただきます』『ごちそうさま』を言いますか」(2014 年前期)

初中級レベル:「待ち合わせの時間は、何分前に行きますか」(2014 年後期)「着物(民族衣装)は、何枚持っていますか」(2015 年前後期)

中上級レベル:「○○(留学生の国籍)と聞いて、何をイメージしますか」(毎期)

第 7 回 アンケート調査②

今回は、図書館職員、情報教育研究センター職員、学事二課(学生課)職員、学内売店、出納職員(その回によって変わる)に予め依頼しておき、各グループに 2 名の日本人回答者を紹介する。前回と違い、業務の邪魔にならないように、訪問先を複数にして学生の数を抑えると同時に、15 分程度の質問で終わるように徹底させる。また前回は学生を引率したが、今回は学生たちに部署と名前を伝えて、学生たちだけで訪問させる。もちろん、教員はその様子を写真撮影と称して何度か様子を見まわす。この 2 回のアンケート調査を行うことで、各グループは 4 名の日本人に質問したことになる。

学生たちが教室に戻ってきた後、残りの 16 名と外国人 20 名をどうするか、回答者が重複しないように学生同士で話し合わせる。日本人にアンケート調査をすると同時に、比較対象として外国人にも同数のアンケートを行うように指導しているが、回答者数を確保するため留学生がそれぞれの先輩(半期前に入学した留学生)、どの教職員を担当するかを決めている。「取り合い」にならないように、担当を決めて、この 1 週間の宿題とする。

第 8 回 アンケート集計

アンケート開始 3 回目になると、自然に行動グループに分かれて座っているが、今回は再度質問グループに分かれて、それぞれの回答を集計させる。本来なら、PC を使って入力すればすぐに終わる作業であるが、学生たちが集めたデータを、自分たちで丁寧に検証させるために手作業で集計させる。最低 20 名以上×4 グループで 80 名近くの回答を質問グループ全員で集計することになる。留学生たちは、他のメンバーの集計表を黙々と転記し集計する。転記が終わると、全員で合計数があるか確認した後、全体の比率を割り出し、これも手作業で表と円グラフを完成させる。表とグラフができれば、報告書用のワークシートを渡す。これも、既にテンプレートを作成しているので、空欄に自分たちの調査結果を書き込めばいいようにしてある。もちろん初級レベルの学生が理解するのは大変であるが、辞書使用は認めているので、単語の意味が理解できれば作業には問題ない。完成した表とグラフと報告は教員が回収して、授業後にエクセルで清書する。

第 9 回 アンケート報告発表

前回作った表とグラフと報告書が清書されて、全員に配布される。それらをもとに、プレゼンテーションを行う。今回もレベル差があるので、発表用のテンプレートを配布し、そこに言葉を入れて話せるようにする。また、最後に感想を書かせるが、ここは本人のレベルでもいいので、思うことを書かせる。

発表時は、全員が壇上にあがり、代表者がテンプレートを元に発表する。初級レベルは、ただ読むだけになるが、手元にはグラフと表があるので、聞き手は十分理解できる。また中上級者になると、テンプレートに頼らず、自分の言葉で発表する学生が現れる。その日本語が理解できない初級学生も、手元の資料で概ねは理解できているようである。発表後、質疑応答時間を設け、学生

同士で質問や感想などのやりとりする時間をもうける。また、教員も、その発表に対して質問をし講評を述べる。

その後、回答協力をしてくれた食堂や清掃職員、売店職員宛てに、お礼のカードを書き、自分たちがまとめた報告書を届けに行かせる。この作業を経て、一つのアンケート調査を終了する。

第 10 回 大学探検②「辞書に載っていない日本語」

第 9 回でひとまずアンケート調査を終え、学生たちも、この授業におけるアンケート調査が何であるかを理解し自信をつけたと考え、今回は 1 回の授業で終わる単発の課題を与える。

学生に配布したプリントには、東海地方で使われる方言やテレビやネットでよく使われる若者語などが 10 ほど書かれている。おそらく辞書には載っていないがよく使われている単語なので、この授業時間内に日本人に聞いてくるという課題を与える。今回はグループは組まない。各人が知っている日本人や、食堂や学内を歩いている日本人に個別で聞いてくればいいと伝える。

前回の大学探検では、学生全員が教室を出ることに躊躇していたが、この段階になると、何の抵抗もなく教室を出て食堂や学内へ向かう。写真撮影を兼ねて教員が後から様子をうかがうと、学生たちはそれぞれ日本人に話しかけて、答えを得ようとしていた。もちろん、仲のいい学生同士で 2、3 人固まって行動している学生もいたが、それでも皆、誰かの答えを写すという様子はなく、積極的に学内を歩き回っていた。

指定の時間になって、学生たちはそれぞれ戻ってきたが、やはり日本人の答えは辞書の字義どおりではないので、若干の違いが見受けられる。しかし、それだけ、学生たちは多くの日本人から答えを得たという証拠でもある。中には、前回アンケートでお世話になった職員や食堂の人に聞いている学生もいた。アンケート以降、わからないことがあれば聞いても大丈夫と思える「知り合い」になっていることがよくわかる。また食堂で声をかけた日本人学生と仲良くなって、LINE を交換したと嬉しそうに報告してくる学生もいた。

第 11 回～第 15 回 アンケート調査 その 2

第 11 回 自分だけのアンケート調査(準備)

学生に再度アンケート調査を行うことを伝える。まず、アンケートの質問例を 40 題ほど挙げた一覧表を配布する。これは、学生が自分で質問が見つけれなかったときのためである。実際、来日半年の学生に、日本社会に対する質問を挙げさせるのは難しい。日本社会もまだ十分体験していないのに、母国との差異を見つけるのは実はとても難しいことなのである。もちろん、中上級レベルの学生の中には、自分が聞きたい質問を設定する学生もいるので、質問したい内容を教員が聞いて、質問項目についてアドバイスをする。

一つずつ質問例を読みながら、自分がアンケートしたい項目を選ばせる。自分の質問が決まると、①なぜそれを選んだか(背景)、②アンケートをした結果、どんなことがわかると思うか(アンケートの狙い)、③結果はどうなると思うか。なぜ、そうなると思うか(仮説)、④回答者リストを挙げる(どれぐらいの回答者数を得られるか)、の順で、考えさせワークシートに書き込ませる。今回も、日本人 20 名以上外国人 20 名以上にアンケートを行うというノルマを課す。

第 12 回・第 13 回 アンケート調査

この 2 回は、ほとんど教室外に出て、日本人に声をかけてアンケートをする時間に費やす。以前のアンケートと違い、グループ活動する必要はない。また、アンケート対象となる別科の教職員や外国人は、質問が全員違うため回答者を「取り合う」ことはないので誰に声をかけてもよいこと、場

合によっては、目の前のクラスメイトに聞くことも可能であることも伝える。

第14回 アンケート集計

規定の各20人以上のアンケートを行っていることを確認し、集計作業に入る。(まだ満たない学生は、教室外に出ることを許可する)前回はやったので、この段階では、皆スムーズに作業をすすめている。集計作業、報告書作成が終わると、教員が回収し翌週までにエクセルにまとめておく。

第15回 アンケート報告発表会

全員がテンプレートに沿って、自分のアンケート調査結果を報告発表する。学生たちの日本語のレベル差は、発音でわからないときもあるが、手元に調査結果の資料があるので、聞き手が理解するのに問題はない。初級から中上級まで、それぞれ自分が選んだアンケートの報告をして、この授業は修了する。

第7章 授業の様子とその影響

アンケート協力者の反応

2014年度後期から2015年度後期までの3期に渡って、この授業を行ってきたが、今のところ大きなトラブルは起こっていない。留学生がアンケート調査をすることによって、周囲の理解も得やすくなってきている。アンケート調査その1で、回答者として依頼している学内関係者たちも、最初こそ戸惑っているようであったが、2期目からは、快く二つ返事で協力していただいている。むしろ、留学生がより理解しやすいように、話し方を変えてみたり、逆に留学生に質問をしたりして会話を楽しもうとくださる方も少なくない。アンケート終了後も、実生活で接する機会が多く、留学生よりも先に関係者のほうから声をかけてくださることもある。

先輩後輩の関係

アンケート調査を終えて後期の後輩たちを迎えるころになると、「今回のアンケートのテーマは何ですか」「誰が(私のところに)質問に来ますか」と聞いてくる先輩留学生も少なくない。どうやら、かつて自分たちが苦勞したアンケート調査に、後輩も苦勞している様子を想像して親近感を覚え、好意的に協力したりアドバイスをしたりしているようである。また、後輩留学生も「アンケート調査は大変だけど、先輩全員もみんなやってきたのだ」という親近感と安心感が、学生のモチベーションに影響していると思われる。

初級学生の変貌

この活動で毎回驚かされるのが、初級学生の変貌である。授業当初は、教員の話も理解できず同国人の中上級レベルの留学生に通訳してもらってやっと理解する程度であり、教室外に出ても、中上級レベルの留学生に何もわからずついていくのが精いっぱいであったが、大学探検②の頃には、食堂で休憩している日本人学生に、質問が書かれた紙を見せながら必死で答えを集めている。わからない単語があれば相手に紙に書いてもらい、その後持ち帰って辞書で調べたりしていた。

またアンケート調査その1の頃は、どうしても中上級者のほうが、理解が早く提出物の完成も早い。初級レベルの学生はそれを参考にして提出しているため少し提出が遅れるが、調査その2になると、日本語能力差で提出が遅れるということが少なくなっている。アンケートの手順は、クラス全員のレベルに関係なく理解されたためだと思われる。

データの扱い方と気づき

データを集計するとき、日本語能力差はあまり関係ない。計算が早い学生もいれば、計算式を忘れていた学生もいる。最初のアンケート調査のときに合計数が合わないと、慌てて全員のメモを照らし合わせ、原因をさぐるグループもしばしばである。一見無駄な行為に見えるかもしれないが、このやりとりを通して、データの扱い方に気づいているようである。適当に集計すると、他のメンバーの結果と一致せず、データ収集の信憑性が損なわれるからである。それだけに、回答者の名前は重要な情報であり、それらを一つ一つ確認しながら再集計させている。

また今回は、日本人と外国人を対象とした単純集計である。表やグラフが完成してから、それらに差異がなく「もしかして年代別に違うのではないか」と考える留学生も出てきた。幸い、日本人の回答者数が 20 名程度だったので、思い出しながら簡単に世代を当てはめ、明確な差異を見出していた。日本語レベルに関係なく、これらのアンケート調査では不十分であることに気づく学生も少なくない。この授業では、正しく社会調査をすることが目的ではない。だが、今回のアンケート調査の不十分さに気づくことで、真のアンケートとは何か、データとは何かを考える機会を提供しているかもしれない。

調査によって明らかになったマナーの異文化

第 1 期で行った「待ち合わせの時間は何分前に行くか」の質問に対して、日本人の多くは 5～10 分前に集中していた。これは、質問を用意していた教員もある程度予測して課題を与えたのだが、その結果を見たドイツ人留学生 2 名が「私たちは、待ち合わせの 1 時間前に行く、それが(ドイツの)マナーだ」と発言した。時間に厳しいと言われるドイツ人と日本人だが、思わぬ相違点が発覚した。一般的に日本の場合、1 時間前に伺うのは失礼である。日本人が 5～10 分前と答えているのは「5 分前までに」という意味ではなく、5 分から 10 分前「の間」に到着する、という回答意図も考えられるのである。残念ながら、ドイツのマナーは 2 名だけの意見であり、調査は既に終わってしまったので再検証は不可能だったが、そのテーマについてクラス全体で話し合うことによって、文化によってマナーが微妙に違うことや日本人との待ち合わせの特殊性を、改めて印象付ける結果になった。

自分が聞きたい質問と調査方法

前述で、学生に質問を自由に考えさせたところ、1 回のアンケートでは難しい質問ばかりだったと述べたが、3 期目ぐらいになると、中上級者の中から「どうしてもこれをアンケートにしたい」という要望があり、内容を吟味しながらアンケート調査を行っていた。主なテーマは「中国人の爆買いについて、どう思うか」「外国人が働いているコンビニエンスストアは、入りにくいかな」など、それぞれ自分の国籍や状況を考えて、質問を考えていた。その際、「なぜその質問をしたいのか(背景)」「どういう結果になるか(予想・仮説)」などを考えさせ、できるだけ社会調査の流れに沿うように指導した。結果は、学生たちの仮説に反して、概ね好意的な反応が得られた。しかし、この調査は面接調査法であったため、本音が聞けなかったという可能性がある。その点も、学生たちは 20 名以上の日本人にアンケートをして気づいていたようである。確かに今回のアンケート調査は、社会調査としては不備である。ただこれらの問題点に気づくことで、さらに正しく調査したいという動機が生まれたようである。

また初級学生の一人は「コーヒーとお茶、どちらをよく飲みますか」という質問を、用意された質問例から選んだ。その理由は、その学生の実家がお茶農園を営んでいるからというものであった。日本語は堪能ではないが、調査の目的は、明らかに「市場調査」である。そのときのアンケート調

査に関しては、誰よりも熱心に回答を集めていたのが印象的であった。

第8章 まとめ

この授業を通して「日本人に声をかける」力は、学生それぞれの日本語レベルで身につけたと考える。しかし、それを数値的に検証する術はなく、テストで計ることもできない。しかし、この3期を通して、アンケート調査結果を提出できなかった学生は一人もいなかった。必ず、日本人20名以上、外国人20名以上の回答を集めていた。実際、どのように回答を得たかは詳細にはわからない。だが決して他人の答を写すことができない課題であるため、自分自身で(多くの他者の協力を得ながら)まとめた結果だと見なしたい。

毎回、最後の授業で学生たちに「何が一番大変だったか」「何が一番うれしかった」について発表してもらっている。おもしろいことにほとんどの学生が、どちらの質問にも「日本人と話すこと」と答えていた。この経験を通して、日本人に声をかけることへの心理的負担が軽減していることを望む。

また学内での活動と限定したことで、留学生に顔見知りの知人が増え、それが大学への愛着や帰属意識につながっていると考える。それと同時に、留学生の日本語能力や置かれている環境について回答協力者を中心に理解も進みつつある。これも、留学生の活動の影響である。

今回の学生のアンケート調査は、たかだか数十名程度の調査であり、それが正式な社会調査だとは決して言えない。しかし今後学生たちが日本社会に疑念を抱いたとき、その疑問を自分が知りうる限りの日本人に聞き続けていくことは、彼らなりの日本社会、文化の理解につながるのではないかと考える。特に、経営学や法学などの社会科学系の学部に進む留学生にとって、人々の意見を聞き、集め、分析するプロセスは、決して無駄ではない。

「異文化理解」、それは、自分と違う文化背景・思考様式を持つ他者を理解しようとする態度である。その態度と意欲さえあれば、人はどこへ行っても生きていけると信じている。留学生の日本での今後の活躍に大いに期待している。

参考文献:

- 住原則也・箭内匡・芹澤知広 共著(2001)「異文化の学び方・描き方—なぜ、どのように研究するのか」 世界思想社
- 谷口聡人、野村美智子、堀歌子著(1992)「実践力のつく日本語学習(インタビュー編)」アルク
- 谷口聡人、野村美智子、堀歌子著(1993)「実践力のつく日本語学習(アンケート編)」アルク
- 白谷秀一・朴相権 編著(2002)「実践はじめての社会調査—テーマ選びから報告まで—」自治体研究社
- 梶原綾乃(2003)「留学生と日本人学生との交流促進を目的としたコミュニケーション教育の実践」日本語教育 117号
- 梶原綾乃(2004)「日本事情」における中国人留学生の日本人観—『日本人への質問』から見る日本— 愛媛女子短期大学紀要 第14・15合併号
- 友野清文(2015)「ジクソー法の背景と思想—学校文化の変容のために—」昭和女子大学 學苑 895, 1-14
- ドミニク・S・ライチェン ローラ・H・サルガニク編著(2006)「キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして」明石書店
- ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウエンガー(1993) 佐伯胖(訳)「状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加」産業図書

(朝日大学留学生別科講師)